

## アメリカの大学における一般体育に関する調査

松元 剛

### 1. アメリカの大学における一般体育の経緯

調査者：松元剛, 吉岡利真

調査期間：2010年3月15日～3月20日, インディアナ州インディアナポリスにて開催された American Alliance for Health, Physical Education, Recreation and Dance に参加した。

調査対象：Dr. Charles B. Corbin (Professor Emeritus, Arizona State University), Dr. Gregory Welk (Iowa State University)

調査方法：インタビュー調査, 資料収集

調査結果：1960年代以前においては, 単位数は2～4単位と大学によって異なっていたものの, 全体の約90%の大学において一般体育は必修として取り組まれてきた。しかし, その後, 徐々に必修の枠が外されるようになり, 1970年代になって約50%までに落ち込んだ。その後若干の戻り現象は見られたものの, およそ約60%で推移している。この背景には, 次のような要因が考えられる。まず, 大学のマンモス化である。第2次世界大戦以降, 戦場からの帰還兵が大学に戻ったこととベビーブーム世代の学生達の登場により, 大学の学生総数が増えたことで, 施設や指導スタッフの問題が浮き彫りにされてきたことが挙げられる。したがって, 学生総数の多い大規模校においては, 必修からの排除が加速されてきた。一方, 学生総数の小規模校においては, その影響は少なく, 現在でも必修として残っている大学が多く見受けられる。その他の要因としては, ①科学至上主義, ②Physical Activity (身体活動) と健康問題, ③競技スポーツの台頭, ④フィジカル・フィットネスに対する関心の高まり, ⑤大学における

一般教養科目の減少などが挙げられる。中でも, フィットネスやウェルネスを中心とした内容に特化した授業が, 1990年代では, 一般体育を必修としている大学の約半数に見られた。Dr. Corbin は, これまでの実技中心の体育から, Fitness for Life を提唱し, 健康問題, 体力問題, 環境問題など, 人生をより良く生きるために必要な要件をテーマにしなが, 講義と実習を中心とした体育のあり方を提唱してきた一人である。なお, 彼の提唱する内容が, 項目ごとにまとめられ, 一般体育における教科書として, 多くの大学で採用されている。

### 参考文献

- Charles B. Corbin, Bradley J. Cardinal: Conceptual Physical Education. *Quest*, 60, 467-487, 2008.
- Charles B. Corbin, Gregory Welk, William R. Corbin, Karen A. Welk: Concepts of Physical Fitness active lifestyles for wellness. 1994, Mc-Graw-hill.

### 2. アメリカの大学における一般体育の現状; 大規模校と小規模校における組織的な取り組みの違い

調査者：松元剛, 谷川聡

調査期間：2010年6月7日～6月12日, カリフォルニア州ロサンゼルス

調査対象：University of California Los Angeles (UCLA), Chapman College における Department of Athletics (大学体育局) の関係者

調査方法：インタビュー調査，資料収集

調査結果：大学体育局と Department of Recreational Sports（レクリエーション部局）が，一般体育の開講に対して，どのような関係に位置しているのかについて，調査を行った。まず，大規模校である UCLA では一般体育は必修科目として取り扱われていない。また，大学体育局とレクリエーション部局は，それぞれが独立して運営されており，一般体育との関連は見受けられない。一方，小規模校であるチャップマン大学においては，大学体育局とレクリエーション部局が組織的に一体化している。すなわち，大学体育局の部局の下に，レクリエーション部局が所属する構造となっている。その中で，大学体育局に所属するコーチ達が，一般体育の指導を実施していた。ここに大規模校との違いがある。すなわち，大規模校においては，大学体育局に所属するコーチは，バスケットボールやアメリカンフットボールなど，通常は競技スポーツの指導のみを行う専門職である。しかし，小規模校においては，各種目のコーチングとともに，一般体育の指導者として，非常勤職員として兼任している。これは，大学における予算的な問題が，影響を及ぼしているものと考えられる。

### 3. オハイオ州立大学における一般体育の現状；大規模校の一例

調査者：松元剛

調査期間：2010年7月25日～31日

調査対象：Jae Westfall (The Ohio State University, Program Manager of Sport, Fitness, and Health Program, School of Physical Activity and Educational Services)

調査方法：講演，インタビュー調査

調査結果：Tsukuba Summer Institute (<http://www.sit.jp>)にて、「The Concept of Wellness –A University's commitment to better health and well-being.–」と題し，オハイオ州立大学における一般体育の現状について講演が行われた。オハイオ州立大

学では，一般体育は必修ではない。また，大学体育局との関連はないが，レクリエーション部局が有する施設を使用する。一般体育の主たる目的の一つに，wellness を実行に移すことが挙げられ，スポーツ技術，身体活動，運動・健康に関連するトピックスに焦点を当てた149種類のコースを提供している。学生すべてが履修可能ではあるが，ターゲットとしているのは学部の1年生と2年生であり，履修登録学生は，毎年およそ12,000人を超える。各クラスに定員数が設けている関係で，人気のあるヨガ・クラスへの登録は，3年待ちの状態になっている。プログラムは，PAESに所属する2人のディレクターが運営し，大学院生と地域のインストラクターなど，約60名のインストラクターが指導を行う。インストラクターは，スキルに応じて採用され，毎年，インストラクターのための集中オリエンテーションに参加し，教授技術と教授ストラテジーを学ばなければならない。そのためのインストラクター・ハンドブックがプログラム・マネージャーによって準備されている。プログラムの年間予算は，約50万ドルである。

### 参考文献

松元剛：オハイオ州立大学における一般体育の現状と学生競技者に対する大学体育局の学業支援について．大学体育研究 32：41-46，2010.

### 4. 大学における一般体育の現状；小規模校の一例

調査者：松元剛，嵯峨寿

調査期間：2011年1月5日

調査対象：伊東克氏 (Morgan State University, Department of Athletics)

調査方法：講演，インタビュー調査

調査結果：大学体育連合主催による第3回大学体育FD研修会にて，「アメリカの大学体育事

情」と題し、メリーランド州立モーガン大学の伊東克氏の講演が実施された。モーガン大学は、学生数が約7,400人の小規模校である。モーガン大学の取り組みとして、①新しい教育モデルの構築、②インストラクターの質を保つためのFD活動、③研究や統計をベースにした体育教育の必要性に関する理論構築と働きかけ、④シンポジウムや全米会議などへの参加による継続的な知識の向上等について報告がなされた。

## 付記

本調査は、日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究(A)(課題番号21240060)の一部である。

## 参考文献

Hensley, D.L.: Current status of basic instruction programs in physical education at American College and Universities. *Journal of Health, Physical Education, and Recreation*, 71(9), 30-36, 2000.